

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 76

俳句通信

特別作品25句 ● 鍵和田柚子「秋の風」

特集 ● 〈藤沢周平の俳句を読む〉

渡戸蘭祖・西池冬扇・八木忠栄・清水哲男・阿部月山子

■「燈」「ひまわり」読書録・大崎紀夫

藤沢周平50句

【鑑賞】

青山 丈句集「千住と云ふ所にて」を読む

坊城俊樹・高柳克弘

【短期集中連載2・新作30句】

鈴木五鈴「盆の月」

【特別寄稿】

金子兜太の彼方へ3

——社会性俳句のテーマ——

筑紫智井

【特別寄稿30句】

赤尾恵以「秋旱」

三田きえ子「真葛原」

●作品●

田中水桜・下林清子・藤本安騎生・

石渡 旬・小島 健・能村研三・

森田公・さちせあや・中根唯生・

小山徳夫・石井 保・太田土男・

須原和男・野田植男・山口昭男・

奥名春江・大石香代子・高田正子

ほか

●好評エッセイ●

先人に学ぶ俳句「阿波野青鈴」岸本尚毅

俳句とともに「蛇術の富士その二」井上康明

虚子の肖像「虚子の言葉」坊城俊樹

新選歌・地味で実な虚子句 五句集を読む

「明治の虚子」阪西敦子

歌部を求めて「時代区分と『起伏』」山縣 神田ひろみ

森澄雄の背なか「九州帝国大学時代 その一」

千田佳代



季節の中で稿

千葉県・総合スポーツセンター



おほらかに芙蓉の朝のはじまれり



前澤宏光

高い木はいい。特に、九月になつて一片雲を浮かべた木を見上げていると、もう年の暮さもこれまでと確信する。

私の家のそばに里の競技場があり、大きな公園の体を成している。そこには様々な樹木と共に、樺、樟の木、ユリの木などの高木がある。高木と言っても、それぞれ特徴があり、その良さも異なる。

木が高くなるには、その木の根も相当大きく張っていることだろう。

秋風や
秋風や
甲羅を
あます
蟹の蟹

秋風

あきかせ

夏目漱石

芥川龍之介



墓塚

目に馴染みの「墓塚」がすっかり姿を消して
久しい。

刈田が広がり、やがて耕田となるが、その時期の田には墓所を燃す煙が棚引き、あちこちに墓塚が散在していた。その間に一つひとつの作業を目にすることが出来た。年々の季節の姿として無意識のうちに心に残していくことだったのである。

墓塚の近くで遊んだり、寄り掛かったりしたこともあった。墓というものが、稲から米を取った後、新たな姿となって生かされ、身近であり、大切なものだと思っていた。

繰り返し返される自然とともにある作業は、ゆるやかでありながらゆるみのないサイクルで、人間が生きていることにちようにとよい速度だったのではなからうか、とときに思う。

稲が色づいたことに安堵して眺めていると間もなく、何もない刈田になり、のっぺらぼうの無用の田となってしまう身近の風景には、置いてきばりをされたような淋しさがある。

墓塚に寄りかかりては唄ひし日 麻績

〈藤沢周平の俳句を読む〉

藤沢周平は26歳から27歳にかけての1年半ほど熱心に俳句を作りました。結核療養時代のと看で、病院の仲間の同人誌に発表したり、「海坂」へ投句したりしています。

小説家になってからもいくつか作つたようで、全集には111句の句が残されています。その句を俳人と詩人5人の方に読んで頂きました。

秋の風

鍵和田柚子

桐一葉きのふとちがふ空の色
まぼろしめく夕富士現れて秋初め
花芙蓉落花たちまち魂ぬけて
名水の澄みて人影ゆがみけり
玉蜀黍ぎつしり吊りて富者のこと
羅の少しさびしき富士樹海

超結社句会 / 新12番勝負



前列右から 奥名氏、広渡氏、中村氏
後列右から 星野氏、瀬谷氏、藤本氏

ゲスト 奥名春江・瀬谷昌義

中村 裕・広渡詩乃

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集長 超結社句会の第21回目です。ゲストは「春野」同人の奥名春江さん、「歴路」同人の瀬谷昌義さん、「鏡」同人の中村裕さん、「朝」同人の広渡詩乃さん。ホストは「玉藻」副主宰の星野高士さん、「泉」副主宰の藤本美和子さん。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 では、高点句から参ります。4点句。

かなかなや振り向けば森とほくなり

◎藤本美和子

昌義 実感です。森の近くに住んでいるんですが、夕方「かなかな」の声を聞きながら帰るときの実感なんです。『かなかな』でこういう句はあまりないのではないかと気がいたしました。

春江 「かなかな」が効いていると思いました。振り向いたときに、森が自分か思っていたより遠くなったという距離感が、「かなかな」をもってくることで、説得力を持ったかなと。

美和子 常套的かなと思いつつ頂きました。というのはお話し立てが出来すぎているかなと。ただ、破綻がなくて景も分かるし、韻律もいいので頂きました。